



Title	ユング＝シュティリングにおける信仰と創作：『ヨ リングエルとヨリンデの話』を手がかりに
Author(s)	長谷川， 健一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2017, 14, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61988
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ユング＝シュティリングにおける信仰と創作

—『ヨリンゲルとヨリンデの話』を手がかりに—

長谷川 健一

はじめに

『ヨーハン・ハインリヒ・シュティリングの生涯』¹は、ドイツ中西部ナッサウ＝ジーゲン侯国の山村グルントに生まれた作家ヨーハン・ハインリヒ・ユング（1741-1817、通称ユング＝シュティリング、以下ユングと略記）²の代表作として知られる自伝的長編小説である。全6巻からなるこの小説のなかで、特に有名なのは、1777年に刊行された第1巻『ヘンリヒ・シュティリングの幼年時代：本当にあった話』（以下、『幼年時代』と略記）³である。そこでは、山間部の大自然に暮らす、信仰篤いシュティリング一家の牧歌的な生活が鮮やかに描き出されており、同時代の読者から好評を持って受け入れられた。⁴

本稿が考察の対象とする『ヨリンゲルとヨリンデの話』*Die Historie von Joringel und Jorinde*は、この『幼年時代』のなかに組み込まれた話、すなわち叔母のマリーヒェンが主人公のヘンリヒ（ユングのこと）に語り聞かせる話のことである。興味深いことに、この話はのちにグリム童話集にほぼそのままの形で収められた。そのため、この『ヨリンゲルとヨリンデの話』が、実際の口承伝承に基づく話であったのか、それともユングが一から創作したフィクションであったのかという問題がしばしば議論されてきた。そうした議論において、この話が明らかにユングによる創作である、と指摘する研究者は多い。⁵確かに、後ほど見るように、ユングがある程度手を加えていることは否定できない。その一方で、グリム兄弟自身、あるいはメルヒェン研究者の一部は、類話が存在すると指摘しているため、この話が完全なフィクションであると断定するのは難しいように思われる。

しかし、本稿の狙いは、この話が口承伝承か、それともフィクションかという議論に決着をつけることではない。そうではなくて、ユングがあたかも本物の口承伝承のように書こうとしたのはなぜか、という理由の一端を探ることにある。作品の副題にもあるように、「本当にあった話」かどうかという問題は、この小説全体に通じる問題であっただけでなく、この時期のユングの創作姿勢の根幹に通じる問題でもあった。また、まさにこの点をめぐって、ユングは一部のキリスト教徒から批判を受けることになった。こうしたことの背景に見えてくるのは、信仰と創作の関係をめぐる問題である。この場合の信仰とは、敬虔主義と呼ばれる信仰のことであるが、ユングを批判したのはこの敬虔主義者たちであった。それではまず、ユングにおける信仰と創作の関係を考える上で押さえておくべき重要

な点を見ておきたい。

1. 信仰と創作のはざままで

ドイツ文学史において、ユングの自伝的長編小説は、モーリッツの『アントン・ライザー』と並んで、敬虔主義の自叙伝の伝統を汲む代表的な作品として紹介されることが多い。その場合、ユング自身も敬虔主義者であったとされる。すでに多くの研究が示している通り、確かにユングの小説にはそうした特徴が認められる。⁶ また、ユングが幼い頃に敬虔主義の教えの影響を受けて育ったというのも事実である。⁷ しかしながら本考察においては、さらに次の二つの点が重要になる。

一点目は、ユングと敬虔主義あるいは一部の敬虔主義者との間に対立が見られたことである。確かにユングは生涯を通じて信仰篤い人物として知られた。晩年には、それまでの宗教的活動がバーデン選帝侯に高く評価された結果、当国の枢密宮廷顧問官に招聘され、やがては「覚醒の太祖」と呼ばれるまでに至った。また、世紀転換期に始まる新たな信仰覚醒運動においても、その宗教的著作を通じて大きな影響を及ぼしたとされている。⁸ しかしその一方で、敬虔主義に対しては、幾つかの著作において激しい批判を展開していたのである。⁹

この関連で重要な点は、ユングの信仰が決して生涯を通じて盤石で揺るぎないものだったわけではなく、やはり 18 世紀啓蒙思想の影響を免れることができなかったということである。とりわけ衝撃を受けたとされるのはライプニッツ＝ヴォルフ哲学の決定論である。¹⁰ そしてこの考えと対峙するなかで、信仰における理性の役割について悩み続ける。こうした状況は、後にカントの『純粋理性批判』を読み、本人と直接書簡のやり取りをして意見を交わすまで、実に 20 年以上続いたとされている。¹¹

この事実を踏まえるならば、ユングが自伝小説の第 1 巻から第 3 巻までを執筆し出版した 1770 年代というのは、まさに自らの素朴な啓示信仰と啓蒙思想との関係をめぐって葛藤していた時期に当たることが分かる。確かに、この時期に、ベルリンの啓蒙主義者ニコライによる宗教批判に向けられたユングの激しい批判¹²や、その後に書かれた信仰懐疑に関する論考¹³を読む限りでは、自らの信仰に何の迷いも感じていなかったようにも見える。しかし実際には、自らの信仰のあり方をめぐって様々な葛藤のなかにあった。そして、その時期をある程度克服した後、特に 1780 年代のユングは「敬虔な啓蒙思想 (die fromme Aufklärung)」を持つに至ったとされている。¹⁴ こうした啓蒙思想との関係については別途考察する必要がある。

二点目は、敬虔主義と文学の関係についてである。『ヨリングルとヨリンデの話』をめぐる「本当らしさ」の問題は、この点に深く関わってくる。敬虔主義が文学に与えた肯定的な影響については、これまでもさまざまな研究によって指摘されてきた。¹⁵ その場合、

例えば、信仰を深めるための教化文学、宗教詩、自叙伝などのジャンルの発展や深化を促し、そうしたジャンルにおける内面性の描写や心情の表現・分析に大きく寄与した点や、中世神秘主義の語彙を掘り起こしかつ刷新することで、ドイツ語の語彙を豊かにした点¹⁶などが挙げられる。しかし、その一方で見ておかななくてはならないのは、敬虔主義の否定的な影響についてである。そのうち本稿で注目するのは、ハレ派と呼ばれた人々、あるいは敬虔主義の一部のグループにおいて見られた傾向である。彼らは小説を含む文学一般や演劇のうち、とりわけ世俗的な素材を扱った作品を敵視し、批判し、排除した。そうしたものを書くことも読むことも禁じられた。というのも、彼らにおいては、真実を語ること、本当のことを語ることが、何よりも重視されたからである。これはいわば「厳格な真実至上主義（Wahrheitsrigorismus）」とでもいうべき態度であった。¹⁷ この姿勢においては、聖書に書かれていることは全て本当のこと、真実として認められるが、小説などの文学や芝居・演劇などについては、たとえそこに道徳的な内容が含まれていたとしても、まったく評価されなかった。¹⁸ その結果、皮肉なことではあるが、逆に反敬虔主義文学とでも呼ぶべき作品が数多く登場する事態が生じた。¹⁹

もちろん『幼年時代』は反敬虔主義文学ではない。しかし、あくまで小説であって、いわゆる「敬虔主義者」による自伝ではなかった。したがって、その意図が何であるにせよ、さまざまな理由からフィクション的な要素が入らざるを得なかった。出版当時の一部の敬虔主義者による批判は、主にこの点に集中していたと考えられる。ただしここで注目しておきたいのは、もしこのような小説が世に出たら批判されるのは必至であると、ユング自身自覚していたのではないかということである。なぜなら、それ以前に作品を書いた際にも同じような批判を受けていたからである。²⁰ そのため、ユングは半ば意識的に、場合によっては自らの信仰が疑われ批判されるのを覚悟で、小説を書いていたと推察されるのである。

もっとも、この見方には反論もあるだろう。なぜなら、ユング自身、第1巻の『幼年時代』は出版を前提に書いていなかったと主張しているからである。出版はせずに、個人や一部の仲間うちだけで密かに楽しむつもりだったのであれば、信仰を疑われたり、創作活動を咎められたりする可能性は低い。そうすると葛藤など存在したのだろうかという疑問も生じる。では、なぜ出版の運びになったかという点、よく知られているように、大学時代の友人ゲーテ²¹がこの原稿を受け取り、編集の手を加えたうえに、ユングも知らないうちに勝手に出版してしまったからである。ゲーテからその知らせを聞いたユングは恐ろしいことが起こるのではないかと考え、心から驚いたという。²² しかし、その一方でユングが、ゲーテに原稿を渡した段階で、すでに人名や地名を全て別のものに置き変えていたという事実は見落とされがちである。²³ つまり出版できる準備はある程度整っていたのである。しかも、原稿がゲーテの手に渡る二年前、ユングは書きかけの原稿をデュッセルドルフにいる友人ヤコービ兄弟に見せ、執筆の継続を強く後押しされていた。²⁴ この兄弟はそれ以前にユングの作品を雑誌に匿名寄稿させ、ユングの文才を認めていたことでも知られ

る人物である。²⁵したがって、仮にゲーテが関与しなくても、またヤコービ兄弟を通じて出版しようとユングが考えていた可能性は十分にある。それゆえ、ユングはやはり出版を前提として慎重に書き進めていたと考えられるのである。

以上の二つの点から推察されることは、ユングは自伝小説を執筆するに際して、自らの信仰のあり方と創作活動が両立し得る道を模索し、葛藤していたのではないかということである。そして、だからこそ、「本当の話」である点にこだわる必要があったと考えられる。もちろん、自伝的エピソードの部分がまぎれもなく「本当の話」であることは、ユング自身繰り返し述べている。しかし、本稿で注目したいのは、ユングは、そこに組み込まれた挿入話、すなわち『ヨリンゲルとヨリンデの話』についても、「あたかも口承伝承のような」という意味で、「本当の話」として書こうとしたと考えられることである。以下、この点を検証しながら論を進めたい。まず、『ヨリンゲルとヨリンデの話』と KHM69『ヨリンデとヨリンゲル』の関係に着目し、ユングが「本物らしさ」を追求した結果が窺われる事例を確認しておきたい。そのうえで、そもそもなぜ自伝のなかに『ヨリンゲルとヨリンデの話』のような挿入話を必要としたのか、また、ユングにとってそれはどのような意味があったかということについて考える。そして、その話が実際にどのように組み込まれているかを具体的に見ていきたい。

2. 『ヨリンゲルとヨリンデの話』から KHM69『ヨリンデとヨリンゲル』へ

まず『ヨリンゲルとヨリンデの話』のあらすじを確認しておきたい。

とある深い森の城のなかに一人の魔法使いが住んでいた。彼女は動物（猫やウサギやフクロウ）の姿に変身したり、城に近づいた者を石のように動けなくしたり、城に近づいた若い乙女を小鳥に変えて城へ連れ帰ってしまう、恐ろしい魔法使いだった。ある日のこと、この森にやってきた主人公の若者ヨリンゲルと美しい娘ヨリンデは、うっかりしてこの魔法使いの城に近づき過ぎてしまう。ヨリンゲルが強い不安を感じたその瞬間、ヨリンデは急に不吉な歌を歌い始め、次の瞬間、小鳥の姿になって飛んでいってしまう。ヨリンゲルの体はその場で石のように動かなくなった。突然、現れた不気味な魔法使いのしわざだった。魔法使いが去るとヨリンゲルは再び動けるようになったが、城に連れ去られたヨリンデを助け出す手段がないので途方に暮れる。やがて知らない村で羊飼いと暮らし始める。そんなある日、ヨリンゲルは森のなかで不思議な花を見つける夢を見る。その花は血のように赤く、中央に真珠がついていた。しかも、その花を持ってあの魔法使いの城に乗り込むと、ヨリンデにかけられた魔法を解くことができた。この夢は正夢となる。翌朝森を探しまわってとうとう同じような花を見つけたヨリンゲルは、魔法使いの住む城に乗り込み、ヨリンデを救い出

すことに成功する。ヨリンゲルは、城に囚われていた他の多くの小鳥たちも、元の娘の姿に戻してやる。二人は長い間、楽しく一緒に暮らした。²⁶

このように最終的にはハッピーエンドを迎える話である。魔法使いとその不思議な魔法、ヨリンデが口ずさむ不吉な歌、動物への変身、不思議な夢など、さまざまな解釈ができそうなモチーフに溢れている。とりわけ興味深いのは、ヨリンゲルが夢で見た不思議な赤い花である。これについては、ロマン派の作家ノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』に登場する青い花モチーフへの影響が指摘されている。²⁷

しかしここで何よりも注目したいのは、グリム兄弟が、自身の編纂する童話集のためにこの話を蒐集したという事実である。兄のヤーコプが弟ヴィルヘルムに宛てた手紙にも、簡単ではあるが「やっとのことで『シュティリングの幼年時代』を手に入れた」²⁸と報告する一文が残されている。その結果、『ヨリンゲルとヨリンデの話』は、1812年に刊行された『子どもと家庭のためのメルヒェン』の初版に、そしてまた『小さな版』にも収められることになった。

この関連で特筆すべきことは、童話集に所収されるに際して、大きな修正・変更の手が加えられなかったことである。²⁹ もっとも、タイトルについては若者と娘の名前の順序が入れ替わり、さらに「話 (Historie)」という表現が落ちて、『ヨリンデとヨリンゲル』となっている。また、魔法使いが変身できる動物から「うさぎ」が削除され、「猫」と「フクロウ」のみになっている。しかし、それ以外の点では大きな変更点もなく、若干の文体的な修正が加えられているのみである。その後も最終版に至るまで殆ど手が加えられていない。口承にせよ、書承にせよ、グリム兄弟は蒐集したほとんどの話に比較的大きな修正を加えているが、ユングの『ヨリンゲルとヨリンデの話』については、いわば、ほぼオリジナルの形のまま所収したのである。では、なぜグリム兄弟はユングの『ヨリンゲルとヨリンデの話』に目を付けたのだろうか。

この理由について、グリム研究者のレレケの指摘はきわめて示唆的である。というのも、レレケは、グリムのメルヒェン蒐集の最初の段階で、幾つかの手本が決定的に重要な役割を担っていたと述べ、そのうえで「ユング＝シュティリングの小説のなかの物語も、書物から取る話の評価の際に、一定の尺度となったのである。その際基準になったのは、最終的に口伝えに由来するという主張あるいは推測、注目に値する内容、適度に芸術的な語り方、この三つである」³⁰と指摘しているからである。この発言は、グリム兄弟がユングの自伝小説に挿入された話を高く評価し、グリム童話の原型・祖型の一つとしていた可能性を示唆するものである。本稿との関係で特に重要なのは、「口伝えに由来するという主張あるいは推測」という指摘である。

では、グリム兄弟はほんとうにユングの『ヨリンゲルとヨリンデの話』が実際の口承伝承だと考えていたのだろうか。断言はできないが、ある程度そのように考えていた節が見られなくはない。そのことは、グリム童話第3版の注釈で、この話の類話を挙げているこ

とから推察される。そこではヘッセンのシュヴァルム地方に伝わる話とされている。具体的には次のような話として紹介されている。

二人の子どもがいた。彼らは大きな森へ入っていった。男の子は一人の魔法使いの城に入る。魔法使いが、細い杖の切れ端で男の子に触れると、男の子は鳥の姿に変わった。女の子は花の夢を見る。その花を使って、男の子を元の人間の姿に戻した。女の子はその花を魔女に突きつけた。すると魔女はカラスの姿に変わった。子どもたちは家に帰る。ある時、二人が庭で遊んでいると、あのカラスがやってきて、木のうえにとまった。女の子はあの花でカラスに触り、カラスを元の姿に戻してやった。³¹

こうしてみると、男の子と女の子の役割が逆転しており、変身する動物の種類も異なっているが、森の中で魔女と遭遇すること、魔女によって動物に変えられること、不思議な花の夢を見てその花の力で元の姿に戻ることなど、『ヨリンゲルとヨリンデの話』と主要な筋の部分で共通していることが分かる。そのため、グリム兄弟もほんの僅かしか違わないというコメントを残している。³² こうした類話の指摘をするのは、グリム兄弟だけではない。ドイツ以外にもスウェーデン、ポーランド、ユーゴスラヴィアに類話があると指摘する研究者もいる。³³

以上のことから、グリム兄弟は、この話を「本当の話」、あるいは少なくとも「本当のような話」と判断して、童話集に所収したと推察される。また、一部の研究者に「口承伝承ではないかもしれないが、一から創作した完全なフィクションとも言い切れない」、すなわち「本当の話に見えなくもない」という印象を与えている点も重要である。したがって、『ヨリンゲルとヨリンデの話』のその後の受容において、ユングの「本物らしさ」の追求は、ある程度、功を奏していたと見ることができるだろう。

しかしながら、ユングはなぜここまでして、この話を『幼年時代』に組み込もうとしたのか。この点については、この小説自体が書かれた動機を探る必要があるだろう。

3. 執筆の動機と「ロマン的な花模様の衣装」

『幼年時代』を書いたそもそも動機は何だったのか。ユングは、第3巻までを出版した時点で、それまでの執筆の経緯をまとめた文章を雑誌『ライン論考集』に投稿している。³⁴ というのは、1779年3月にこの雑誌に寄せられた匿名の読者の手紙のなかに、自分の自伝作品を批判し、しかも本当の話であることを疑うような内容が含まれていることに気付いたからである。³⁵ すなわち、この本の執筆動機は、読者の批判を受けたユングが、この本がいかに事実と真実に基づいて書かれているかを説明しようとした投稿記事に綴られていた。以下はしばしば引用される箇所であるが、本稿との関係で重要な点を含んでいる

ので改めて見ておきたい。

私は、シュトラースブルクの友人たちが軽やかで機知に富むフランス趣味をどんなに好んでいるか、また彼らの信仰の基盤がどんなに揺らいでいるか知っていたので、彼らに私の身の上話をロマン的な花模様の衣装に包んで提供したら、神の先慮の明白な足跡(die deutlichen Fusstapfen der göttlichen Fürsicht)が、好ましい方法で示され、彼らは読むことを楽しみ、得るところが多いであろう、と信じました。³⁶

ここで「身の上話」と記されているのが、後の第1巻『幼年時代』の原型となるものであるが、この引用から読み取れる興味深い点は三つある。

一つは、この原稿が誰のために書かれたかということである。ユングは1770年の秋、30歳の時に、シュトラースブルク大学の医学部に入学し、1772年3月に卒業するまでの1年半の間に、後のドイツ文学において活躍する人物たちと知り合い、彼らを通じて当時の最先端の文学や思想に触れることになった。なかでもゲーテ、そしてヘルダーとの出会いが彼に少なからぬ影響を与えたことは周知の通りである。³⁷ただし、ユングがこの原稿を書こうと思い至ったのは大学卒業後、エルバーフェルトで眼医者として働いていた時期である。また、原稿を書いたユングはその一部を時折シュトラースブルクに宛てて送ったとしているが、その時には既にゲーテもヘルダーも同地に居なかった。したがって、ユングは彼ら以外の、まだ同地に残っていた仲間を念頭に置いて書いていたことになる。

もう一つは、この原稿が書かれた目的が明記されていることである。すなわちそれは何よりも信仰のため、しかも上記の一部の友人たちの信仰を深めるためであったことが窺える。この関連ではさらに「神の Fürsicht」という表現が重要である。これは、言い替えるならば「神の Vorsehung」、つまり「神の先慮」ないしは「神の摂理」を意味し、多くの研究が指摘しているように、敬虔主義の考え方に由来する思想を含んだ表現である。³⁸ 実際ユングは、自分が進むべき道を神は直接的に示し、導いてくれているという強い確信のもと、自分に対する神の意図を知らなくてはならないと考えていた。そのためこの表現は、彼の小説のなかでも第2巻以降で徐々に登場頻度を増し、ユングの信仰を特徴づけるものとして重要な役割を担っている。

しかし、三つ目として、本論との関係で何よりも興味深いと思われるのは、「ロマン的な花模様の衣装」を用いた、と書かれている部分である。この「ロマン的な」という意味は、必ずしも一義的ではなく、幾つかの意味で理解しなければならないように思われる。その場合、「創作の」、「フィクションの」、さらには「小説の」といった意味を含んでいると考えることができる。そのように理解するならば、ユングはさきほどの引用箇所において、自らの自伝に「小説やフィクションのベールを掛けた」、あるいは「フィクションを組み込んだ」と主張していることになる。前者の場合、自伝を小説化するための幾つかの技法を施したということ、後者の場合、何らかのフィクションを組み込んだというメッセ

ージとして理解できよう。またこうした「花模様の衣装」に、ある種の娯楽的な役割を与えようとしていたことも窺える。

研究者のラウターヴァッサーは、この自伝を小説化した最大の要因は、自伝のなかに挿入されている「民謡、伝説、そしてメルヒェン風の話」にあるとしている。³⁹ この指摘に依るならば、『ヨリンゲルとヨリンデの話』はもちろんこと、第1巻から第3巻に登場するその他の伝説、民謡、メルヒェン風の話もまた、自伝を飾るために着せられた「花模様の衣装」だったことになる。この背景に、さきほど見たヘルダーやゲーテの、いわばシュトゥルム・ウント・ドラング期の精神の影響を見て取ることは難しくない。

ところで、これらの「ロマン的な花模様の衣装」は、実際にユングの生まれ育った地方に伝わるものを書き記したものだったのか、それとも、小説を飾る目的でユング自身が一から創作したものだったのか。本稿では、『ヨリンゲルとヨリンデの話』に関しては、口承伝承を忠実に書き記したものではないと推測しているが、事情はそれ以外の「花模様の衣装」についても同じだったのだろうか。

この問題を考えるうえで極めて興味深い記録が残されている。それは、ユングと後期ロマン派の詩人フケーとの書簡のやり取りのなかに見出される。二人は1810年から1813年にかけて、しばしば民謡や音楽一般に関して意見を交わしていた。そのなかで、フケーはユングの自伝小説に登場する民謡のメロディーを教えて欲しいと依頼した。⁴⁰ 以下は、その依頼への返答としてユングが書き送った1810年5月12日付けの書簡である。

ロマンツェあるいは民謡に関しては、全て、一つの例外もなく、私自身が書いたというのを申し上げておきます。私のおばたちは、同じような歌を歌っていましたが、私はそれらをもう覚えていませんでした。14歳まではそれらの歌を聞いていたのですが、『シュティリングの幼年時代』を書いたのは34歳の時です。その時にはすべて忘れていました。要するに、私はそれらの歌を自作のものに置き変えたのです。シュティリングの『幼年時代』『青年時代』『遍歴時代』のなかの出来事は、すべて本当にあったことです。ただし、ところどころロマン的なイデーで飾りました。しかし、『家庭生活』『修業時代』は、完全に事実に基づいた自伝です。私の行動や私の話はまったく本当のことなのです。⁴¹

驚いたことに、ユングはこの箇所で、自伝のなかの出来事がすべて本当の話であると強調する一方で、「飾り」としての民謡（ロマンツェ）に関しては、自作、すなわち完全に創作したと告白している。20年も昔のことだったので記憶から抜け落ちてしまっていたとする理由は、確かにもっともな理由である。

しかし、本稿との関連でさらに興味深い点は、ユングがおぼろげな記憶をたどりながら創作した民謡を、フケーは本当の民謡であると信じ込んでいたことである。勿論、彼が見抜けなかった背景には、別の事情も影響していたと考えられる。というのも、例えば、ボ

一テ編纂の『民謡集』にはドイツの民謡として4編収録されていたが、その4編ともユングの自伝からそのまま収録されたものだったからである。⁴²しかしこうした事実から窺えるのは、いかにユングが本当らしく見えるように巧みに創作していたかということ、そして当時はそれが実際に功を奏していたという実態である。⁴³

以上の考察を踏まえると、やはり『ヨリengelとヨリンデの話』についても、ユング自身が創作した可能性がさらに強まってくる。もちろん、上述の民謡の場合のようにおぼろげな記憶があった可能性もあるため、完全なる創作だったのか、それとも部分的な創作だったのかについては定かではないが、いずれにせよ、何らかの創作の手が加えられたとするならば、この話はまさに「ロマン的な花模様の衣装」の一つとして、『幼年時代』のなかのエピソードと有機的に結び付けられているはずである。そこで注目したいのは、『ヨリengelとヨリンデの話』がどのような形でエピソードを飾り、どの程度重要な「飾り」として用いられているか、という点である。というのも、これらの点から、ユングが「飾り」についても「本当らしさ」にこだわって創作した理由が見えてくると思われるからである。

4. 「飾り」としての『ヨリengelとヨリンデの話』

4-1 「祖父の死」というエピソード

『ヨリengelとヨリンデの話』は、『幼年時代』の終盤に登場する。まずは主要エピソードを、描かれている順にごく簡単に見ておきたい。

冒頭では作品の舞台となる山間部の自然と村の様子が描写され、この土地に古くから住むシュティリング一族のこと、そして主人公のヘンリヒ（ユングのこと）の祖父母について語られる。次に、その祖父母の間に生まれたヴィルヘルムが元牧師の娘ドロテア（ドルトヒェン）と恋に落ち、両親の反対を押し切って結婚すること、その二人の間に主人公ヘンリヒが生まれたこと、しかしその母親が若くして病気で亡くなるまでが描かれる。続いて、最愛の妻に先立たれ失意に底に沈んでいた父が、ある信仰者からの教えを受けて立ち直り、息子のヘンリヒに厳しい宗教教育を施したこと、そのヘンリヒが夢見がちな性格ながらも村の牧師が舌を巻くほどに賢く、成績優秀な少年へと成長したこと、一族が彼を隣村のラテン語学校へ進学させようと検討し始めたことなどが語られる。

しかし、物語の終わりに近づくと、再び祖父シュティリングをめぐるエピソードが中心となって展開する。『ヨリengelとヨリンデの話』が挿入されているのはこの部分である。少し詳しく見てみよう。

まず、祖父シュティリング、叔母のマリーヒェン、そしてヘンリヒの三人が、森に薪集めに出かけるところから始まる。森に到着すると、祖父は二人をその場に残し、一人だけ

森の奥に向かう。その祖父の帰りを待っている間、叔母のマリーヒェンは、ヘンリヒにもう一度あの『ヨリングエルとヨリンデの話』をして欲しいとせがまれる。祖父はその話が終わってほどなくして戻ってくる。二人はその祖父の口から驚くべき報告、すなわち、森の奥を歩いていると、亡くなったはずの義理の娘ドルトヒェン（ヘンリヒの母親）に遭遇したという話を聞かされる。

祖父はこの幻視体験のなかで、ドルトヒェンに「お父さん、あそこにあるのが私たちの永遠の家ですよ。もうすぐ私たちのところに来ることになるのですよ」⁴⁴と呼びかけられたことで、自分の死期が近いことを悟る。その後しばらくしてから、屋根の葺き替え作業をしていた祖父シュティリングは、あやまって足を滑らせて転落する。そして、このときの怪我が原因で帰らぬ人となる。この死は、森のなかで幻視体験をした人は必ず命を落とすという村の言い伝えが的中する形にもなっている。

こうして見てみると、『ヨリングエルとヨリンデの話』は、あたかも祖父の死を予感させるような幻視体験の直前に組み込まれていることが分かる。その設定には、明らかにユングの何らかの意図が感じられる。というのも、その後のコンテクストとの間に、偶然とは言い難い一致が見て取れるからである。まず、マリーヒェンがヘンリヒに話を語り終わった直後の箇所を以下に引用してみよう。

ヘンリヒはまるで石のように固まって座っていた。目はまっすぐ前に向けられ、口は半分開いていた。ヘンリヒはとうとう、「おばさん！夜にこんな話を聞いたら不安になっちゃうよ」と言った。おばは、「そうね、私も夜には話さないわ、私自身が不安になっちゃうから」と答えた。⁴⁵

ヘンリヒとマリーヒェンがともに「bang（不安で恐い）」という感想を口に出していることに注目したい。あらすじについては第2章で紹介した通りであるが、『ヨリングエルとヨリンデの話』を聞いた感想として、最初にこの言葉が出て来る点には若干の違和感を覚える。むしろ、ヨリングエルが不思議な花の力を借りてヨリンデにかけられていた魔法を解き、二人がその後仲良く暮らしたという幸せな結末を聞いて、ほんと胸を撫で下ろして喜ぶ、というのが通常の反応ではないかと思われるからである。

しかし、『ヨリングエルとヨリンデの話』を今一度読み返して見ると、「bang」という表現が何の脈絡もなく登場しているわけではないことに気付く。というのも、話のなかで、若者のヨリングエルが近づいてはいけない魔法使いの城に近づきすぎた時に、「todbang」になったと書かれているからである。⁴⁶ もちろん、この場合の「tod」の働きは「bang」の意味を強める点にあるが、本来の「死」という意味が含意されていると捉えることもできる。実際、この「todbang」が使われた直後の展開において、娘ヨリンデは、自らが小鳥に変えられて捕らわれの身となる運命、いわば一時的な死を予感させるような不吉な歌として、「赤い輪をはめた私の小鳥が、かなしい、かなしい、かなしいと歌ってる。その小鳥は、

小鳩に向かって、じきに死ぬよと歌ってる、かなしい、かなしい、と…ツイキュー、ツイキュー、ツイキュー」⁴⁷と歌い、聞き手の不安を増幅させている。

こうした点を踏まえると、『ヨリングエルとヨリンデの話』は、ヘンリヒとマリーヒェンの二人に不安や恐ろしさをかきたてる役割を担っていることだけは確かなようである。この理由については、シュトゥルム・ウント・ドラング期の作品に好まれたという、恐くてメランコリックな雰囲気を醸しだすためと指摘されることもある。⁴⁸しかし、理由は単にそれだけにとどまらないように思われる。ユングはこの話にそうした傾向を取り入れつつも、その主眼としては作品の終盤に訪れる祖父の死を予感させる役割、その意味では、『幼年時代』の主要エピソードを「飾る」という役割を与えていると考えられるからである。ただし、この役割は、次に見る幻視エピソードにも与えられている。だとすれば、こうして同様の役割を持った二つのエピソードが立て続けに組み込まれていることに、どのような意図を読み取ることができるのか。

4-2 2つのエピソードの対比

その一つとして考えられるのは、祖父の死というエピソードをドラマチックに飾ろうとする意図である。この背景には、敬虔な祖父の最期が、神の先慮を通じて告知されたということを強く印象付けようとするユングの姿勢が見えてくる。そこで、いま一度、祖父が語った幻視体験の箇所を確認しておきたい。

祖父シュティリングによれば、森のなかを歩いていると、突然まぶしく光り輝く何千という城が目の前に現れ、そのうちの一つから、義理の娘でヘンリヒの母であるドルトヒェンとヒェンが出て来たという。祖父は彼女に「あそこにあるのが、私たちの永遠の家です、あなたは、すぐに私たちのところに来ることになります」⁴⁹と声をかけられる。祖父はこの呼びかけによって死を予感し、この体験の後に、マリーヒェンとヘンリヒに向かって、「子どもたちよ、私はまもなく死ぬのだ。何と楽しみなことか！」⁵⁰と語る。

ここで注目したい点は、二つある。一つは、森の奥に突如現れた光り輝く城の存在である。いま一つは、祖父が口にした死への憧れを思わせる発言である。こうした点を踏まえて、あらためて『ヨリングエルとヨリンデの話』と幻視エピソードを幾つかのモチーフやその描かれ方に注目して比較して見ると、ほぼ対照的な関係において描かれていることが分かる。

まず、それぞれのエピソードの舞台については、どちらも共通して森のなかとされている。しかし、その森のなかで遭遇する相手が、望ましい相手だったか否かという点では異なっている。すなわち、『ヨリングエルとヨリンデの話』では二人が恐ろしい魔法使いに遭遇し、幻視エピソードにおいては祖父シュティリングが亡き義理の娘ドルトヒェンと遭遇している。また、遭遇の時間帯と遭遇者の住む場所についても対照的である。ヨリングエルとヨリンデが魔法使いに遭遇するのは日没直後の夜である。魔法使いは闇に包まれた森の

奥の城からフクロウに姿を変えて飛んでくる。これに対して、祖父がドルトヒェンに遭遇するのは薪集めをしていた早朝からお昼にかけてのことであり、ドルトヒェンはまばゆい光に包まれた幾千もの城の一つから出てくる。

死を予感したときの反応についても対照的である。すでに指摘したように、魔法使いの城に近づきすぎた時、ヨリングエルは「todbang（死の不安）」を覚えるが、祖父シュティリングは逆に死への憧れを口に出しているからである。祖父にとって死は恐れるものではなく、親しくしていた人々といっしょに神のそばで、喜びのうちに、そして永遠の安らぎのうちに暮らせるようになるという意味でも歓迎すべき事態として受け止められている。ただし、幻視といういわば無意識的な非日常的な体験が「よき知らせ」をもたらしたという点では、ヨリングエルが見た夢、すなわち、森で見つけた不思議な赤い花の力でヨリンデを救い出す夢、と共通した側面を持っている。その意味では、どちらのエピソードも、いわばユングが重視していたいわゆる「先慮信仰」との強い結びつきが認められるのである。

以上の比較から明らかなように、『ヨリングエルとヨリンデの話』は、その直後に来る幻視エピソードと極めて密接に関連付けられている。そしてそのどちらもが、やがて訪れる祖父の死を劇的に、かつ宗教的に予感させる形で飾っているのである。したがって、この『ヨリングエルとヨリンデの話』という「飾り」は、なくてもよいような瑣末なものではなく、むしろ極めて重要な役割を担っていると見なければならない。

もっとも、この話に登場する象徴的なモチーフや登場人物の行動の全てを、前後のエピソードと一つ一つ関連付けて説明することはできない。すなわち『ヨリングエルとヨリンデの話』は、単に幻視や祖父の死といったエピソードを飾るためだけに書かれたわけではないと考えられる。

例えば、魔法使いについて見てみよう。娘のヨリンデを小鳥に変えて連れ去り、ヨリングエルを石のように動けなくしたという点では悪い魔女のようにも見える。この話を聞き終わったヘンリヒが不安を口にするのもそのためである。しかし、この魔法使いは悪い魔女ではない。だからこそ、最後に因果応報的に処罰や残酷な報いを受けることはない。不思議な赤い花の力で魔法が使えなくなるだけである。その不思議な赤い花にしても同様である。自伝のエピソードからは離れた別のコンテクストに置かれており、何か特別なメッセージを付与されているように思われる。このことは、その後グリム童話集にほぼそのままの形で所収されたこの話が、これまで実に様々に解釈されてきた事実からも見て取れる。

こうしたことから推察されるのは、この『ヨリングエルとヨリンデの話』にはその原型となる話の一つ、あるいは複数存在し、ユングはそれらを巧みに組み合わせてこの話を書き上げたのではないかと、ということである。また、その際は、さまざまな口承伝承だけでなく、彼が幼いころから親しんでいた様々な物語、さらには聖書の話が重要な役割を果たしたのではないかと考えられる。例えば、ユングの処女作とされ、ヤコービ兄弟の仲介で掲載された物語『アゼ＝ナイト・オリエントの話』などは聖書の創世記の素材を用いて書かれている。⁵¹そのため『ヨリングエルとヨリンデの話』についても聖書の素材との関連で特

別な意味を付与されていることは十分に考えられる。

しかし、完全な創作であるにせよ、部分的な創作であるにせよ、『ヨリンゲルとヨリンデの話』を書いたのはユング自身であった⁵²こと、そのユングに「本当の話」のように巧みに作り込む力があつたこと、そして、そうしたフィクションの力を積極的に活用していたことは確かである。

その背景には、確かにユングの信仰の強さ、友人の信仰を深め、自らの人生の描写を通じて神の先慮の足跡を示そうとする強い意識があつたのかもしれない。しかしそれと同時に、「飾り」すなわち、フィクションそのものに対する純粋な創作意欲があつたことも推察できるのである。次章では、この点についてさらに考察したい。

5. 「飾り」をめぐる葛藤

5-1 消えた「飾り」

ユングは、フィクションないしは「ロマン的な花模様の衣装」に、本当に創作との関連で積極的な意味を見出していたのか。それとも、あくまで信仰促進のための補助的な手段としてしかみなしていなかったのか。この問題を考える手がかりとして、まず 1817 年に出版された自叙伝第 5 巻『修業時代』の補遺として書かれた『回想』から、その冒頭部分を引用しておきたい。そこには次のように書かれている。

『幼年時代』の物語では、人物たち、その性格、ならびに物語そのものは、ありのままに記述され描写されているが、その中にはしかし、いろいろな飾りが登場する。というのも、当時の目的が飾りを必要としたからである。しかし、それ以降の巻では数が減り、その結果、『青少年時代』では僅かな数に、『遍歴時代』ではさらにわずかな数になり、『家庭生活』ではもはや一つも登場しない。⁵³

『青年時代』、『遍歴時代』、『家庭生活』というのは、それぞれ自叙伝の第 2 巻、第 3 巻、第 4 巻にあたる表題である。ここで注目したいのは「飾り」*Verzierung* が巻を追うごとに減っていったこと、第 4 巻では完全に消えたという指摘である。ここでいう「飾り」という表現はこれまで見てきた「ロマン的な花模様の衣装」を意味すると考えてよいだろう。そうすると、この「飾り」には、やはり民謡、伝説、そしてメルヘン風の話が含まれることになる。

そこで、各巻に登場する「飾り」の数を数えてみると、次のような結果が得られる。すなわち、第 1 巻『幼年時代』(1777) には民謡 2、伝説 1、メルヘン風の話 1、第 2 巻『青年時代』(1778) には民謡 1、伝説 1、メルヘン風の話 2、第 3 巻『遍歴時代』(1778) に

は民謡 2、第 4 巻『家庭生活』(1789) には 0、第 5 巻『修業時代』(1804) 0、第 6 巻『老年』(1817) 0 となる。第 1 巻と第 2 巻の間に数としての差はないものの、第 3 巻で大幅に減少し、それ以降になると一つも登場しないというユングの認識自体は確かに正しい。

上記の引用を踏まえるならば、自伝のなかから徐々に「飾り」が消えていった理由は、第 1 巻の執筆時に掲げていた「当時の目的」が徐々に意味を持たなくなったからであると推察される。しかし、ここで注目したいのは、「飾り」が第 2 巻からすぐに消えてなくならなかったという点である。もっとも、第 2 巻のなかの「飾り」は、数としては第 1 巻とほぼ同数である。ところが、第 1 巻の飾りと異なる特徴が見られることに気付く。例えば、メルヒェン風の話⁵⁴について言うならば、第 1 巻の『ヨリンゲルとヨリンデの話』のようにまとまった形では組み込まれていない。しかも、登場人物の会話のやり取りのなかで語られるだけである。その長さについても格段に短くなっている。そのため、第 1 巻においてほどは存在感がなく、「飾り」としての役割も第 1 巻ほどには大きくないように思われる。

5-2 「飾り」の変質とその理由

こうした「飾り」についての質的変化の理由については、どのように考えることができるだろうか。ここでふたたび『ライン論考集』の投稿記事を手がかりに考えてみたい。以下の箇所からは、周囲からの批判を受けたユングが妥協を図ろうと作風を転換したことが窺われる。

これらの善良な人々はシュティリングの『幼年時代』を理由に言いようのない苦しみ
を私に与えました。私は無神論者として批判されたのです。こうした災難と不快な気
持ちをある程度うまく抑えようと思い、私は第 2 巻と第 3 巻においてはロマン的な調
子と神学的な調子との間の中間を取ろうとしました。⁵⁵

ここで「善良な人々」とされているのは、彼が目医者として開業していたエルバーフェルトに住む敬虔主義者たちのことである。彼らの批判のせいで、第 1 巻に続く続編の執筆において、不本意な方針転換を図ったことが分かる。さらに興味深いのは、次の部分である。

これは非常にやりにくいことでした。というのも本来であれば花々を咲かせようと思
っていた場所を取るに足りない細々した内容で埋めなければならなかったからです。
エルバーフェルトにおいて私はこの目的を完全に達成しました。しかし私が見る限り
では、結果として彼ら（敬虔主義者たち：論者）と、そしておそらく私の読者の多く
は、このことに対して不満を抱いているかもしれません。⁵⁶

すなわち、方針転換の結果、新たな方針自体は完全に達成できたものの、エルバーフェルトに住む敬虔主義者たちはおろか、自分の読者までも、この作風の転換によって満足させられなかったという認識が窺われる。それと同時に、ユングとしても、できることなら第1巻の時と同じように「飾り」を十分に用いて書きたかったという悔しい思いを滲ませている点は注目に値する。第1巻においても『ヨリンゲルとヨリンデの話』を始めとした「飾り」が重要な役割を果たしていたという認識も見て取れるだろう。こうした執筆方針の転換の背景からは、信仰と創作活動を両立させることの難しさのなかで葛藤していたユングの姿が見えてくる。

ここであらためて、第2巻からも第3巻からも、「飾り」が完全には削除されなかったという事実を思い起こしたい。もしも敬虔主義者からの批判を避けたかったのであれば、続編において直ちに「ロマン的な調子」を完全に消し去ればよかったはずである。しかし、実際にはそうしなかった。このことから、やはりこの時期のユングには、「飾り」というフィクション的要素に対する強い思いがあり、その可能性をそう簡単には手放せなかったということが推察される。

加えて指摘しておきたいのは、上記で引用したユングの嘆き、すなわち敬虔主義者からの批判があったことを述べた箇所は、これまで何度か引用してきた『ライン論考集』に掲載された内容だったということである。この時、ユングはすでに批判的な敬虔主義者たちのいるエルバーフェルトを離れ、カイザースラウテルンの地で教授職に就いていた。だからこそということもあるかもしれないが、こうして公の場で敬虔主義を批判するようになった姿勢から、それまでの伝統的な信仰から離れ、独自の信仰の道を模索しようとしていたユングの姿が見て取れるように思われるのである。⁵⁷

おわりに

『ヨリンゲルとヨリンデの話』をはじめとして、ユングが自伝小説で用いた幾つかの伝説やロマンツェ（民謡）、すなわち「ロマン的な花模様の衣装」は、一見すると、あくまで本来の目的である神の先慮を受け入れやすくするための、あるいはその表面を飾るだけの補助的な手段として、場合によっては些末な役割しか担っていないようにも見える。

しかし、執筆当時のユングに信仰をめぐる葛藤があったこと、創作をめぐって敬虔主義者に対する反発を感じていたことを踏まえつつ、『ヨリンゲルとヨリンデの話』が置かれた本来のコンテクストを分析していくと、この話が小説の構成要素として重要な役割を担っていること、そして少なくとも当時のユングのなかには、自らの信仰とどう折り合いを付けるか悩みながらも、世俗的な素材への関心を示し、フィクションに挑戦しようとする強い意欲が窺えることは確かである。この話が後にグリムの目に留まったのも、そうした意欲に基づいて書かれた完成度の高いものであったからと見てよいかもしれない。

ユングが自伝小説の執筆に際して、『ヨリンゲルとヨリンデの話』に代表されるようなさまざまな「飾り」をちりばめ、その「本当らしさ」を追求した結果、期せずして、同時代の民謡集、グリム童話集、そしてドイツ伝説集に収録されるに至ったという点⁵⁸は、敬虔主義と文学の接点を考えるうえで、極めて興味深いと言えよう。

なお、本論で考察したユングの創作姿勢の特徴は、あくまで自伝小説の第1巻『幼年時代』を執筆した前後の時期に限ったもの、それも『ヨリンゲルとヨリンデの話』との関連で見えてきたものである。それ以外の時期のユングにおける信仰と創作の関係については、また別の作品との関連で論じることにはしたい。

¹ 本稿では以下の3つのテキストを利用した。本文ないしは注において引用する際には、それぞれJH、JS、JMと略記し、横にページ番号を添えた。①Johann Heinrich Jung-Stilling: *J. H. Jungs Lebensgeschichte. Johann Heinrich Jung genannt Stilling. Sämtliche Schriften. Band 1*. Hildesheim [u.a.] 1979.(JHと略記)、②Johann Heinrich Jung-Stilling: *Henrich Stillings Jugend, Jünglingsjahre, Wanderschaft und häusliches Leben. Mit einem Nachwort und Anmerkungen von Dieter Cunz*. Stuttgart 2013.(JSと略記)、③Johann Heinrich Jung-Stilling: *Lebensgeschichte. Mit einem Nachwort von Wolfgang Pfeiffer-Belli*. München 1968.(JMと略記)。なお、全6巻のタイトルと出版年は以下の通りである。第1巻『ヘンリヒ・シュティリングの幼年時代、本当にあった話』*Henrich Stillings Jugend. Eine wahrhafte Geschichte*(1777年)、第2巻『ヘンリヒ・シュティリングの青少年時代、本当にあった話』*Henrich Stillings Jünglings-Jahre. Eine wahrhafte Geschichte*(1778)、第3巻『ヘンリヒ・シュティリングの遍歴時代、本当にあった話』*Henrich Stillings Wanderschaft. Eine wahrhafte Geschichte*(1778)、第4巻『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活、本当にあった話』*Henrich Stillings häusliches Leben. Eine wahrhafte Geschichte*(1789)、第5巻『ハインリヒ・シュティリングの修業時代、本当にあった話』*Henrich Stillings Lehr-Jahre. Eine wahrhafte Geschichte*(1804)、『ハインリヒ・シュティリングの老年、本当にあった話、あるいはヘンリヒ・シュティリングの生涯第6巻』*Henrich Stillings Alter. Eine wahre Geschichte. Oder Henrich Stillings Lebensgeschichte Sechsterband*(1817)。第1巻から第4巻までは匿名で出版され、残りの巻は実名で出版された。1835年に刊行された全集版では自叙伝全6巻が一巻にまとめられた。①に挙げたテキストは、その全集版のリプリント版である。

² ユングには、作家以外にも、仕立て職人、小学校教師、家庭教師、工場経営補佐、眼医者、大学教授(経済学、財政学、会計学など)、そしてバーデン選帝侯国の枢密宮廷顧問官など、さまざまな職歴・経歴があった。そのうち眼医者としての名声はゲーテの『詩と真実』を通じてよく知られている。大学教授としては、カイザースラウテルン大学とハイデルベルク大学(1778-1787)、さらにはマールブルク大学(1787-1803)で教鞭を取った。晩年、枢密宮廷顧問官(1803-1817)を務めていた時期は、彼を招聘した選帝侯カール・フォン・バーデンの要望により、眼医者の仕事を継続すると同時に、数多くの宗教的著作の執筆に取り組むことになった。

³ ユングの本名は「ハインリヒ」であるが、第1巻は匿名で出版していたこともあり、主人公の名前は「ヘンリヒ」となっていた。

⁴ 第1巻『幼年時代』について、ニーチェは『人間的、あまりにも人間的』のなかで、何度も繰り返して読むに値するドイツの散文作品の一つに挙げている。Vgl. Giorgio Colli und Mazzino Montinari (Hg.): *Friedrich Nietzsche. Menschliches, Allzumenschliches I und II*. Berlin[u.a.] 1988, S. 599.

⁵ これまでの議論については、以下を参照。Vgl. Manfred Grätz: *Das Märchen in der deutschen Aufklärung*. Stuttgart 1988, S. 179-181. また、最近の研究としては、ウターによる以下を参照。Vgl. Hans-Jörg Uther: *Die Brüder Grimm und Heinrich Jung-Stilling. Von Jorinde und Joringel und anderen Erzählungen*. In: Ulrich Müller[u.a.](Hg.): *Paare und Paarungen*. Stuttgart 2004, S. 294-305.; Hans-Jörg Uther: *Handbuch zu den >>Kinder- und Hausmärchen<< der Brüder Grimm. Entstehung-Wirkung-Interpretation*. 2. Auflage. Berlin 2013, S. 158-161.

⁶ 敬虔主義の自伝研究ならびにユングの自伝的小説については、伊藤氏の以下の論文ならびに研究書で詳しく論じられている。伊藤利男「ユング＝シュティリングの自伝小説」、九州大学『独仏文学研究』17号 1967年、7-13頁。伊藤利男「ドイツ自伝小説と敬虔主義―『ハインリヒ・シュティリングの伝記』と『アントン・ライザー』への考察」、九州大学文学部『文学研究』79号 1982年、99-152頁。伊藤利男

「第 13 章 ユング＝シュティリングの自伝連作——自叙伝から自伝小説へ——」、『敬虔主義と自己証明の文学』 人文書院 1994 年、452—457 頁。また、小説としての『幼年時代』の分析については、以下を参照。Vgl. Walter Lauterwasser: *Jung-Stilling als Erzähler. In: Jung-Stilling. Arzt-Kameralist-Schriftsteller zwischen Aufklärung und Erweckung. Ausstellungskatalog.* Herausgegeben von der badischen Landesbibliothek Karlsruhe. 1990, S. 81-111.

⁷ Vgl. Gustav Adolf Benrath: *Jung-Stillings Frömmigkeit.* In: Michael Frost (Hg.): *Blicke auf Jung-Stilling. Festschrift zum 60. Geburtstag von Gerhard Merk.* Kreuztal 1991, S. 95-113.

⁸ Vgl. Martin Brecht[u.a.](Hg.): *Geschichte des Pietismus. Band 2 Der Pietismus im achtzehnten Jahrhundert.* Göttingen 1995, S. 732-738.

⁹ 例えば、以下を参照。Vgl. Martin Völkel: *Jung-Stilling: Ein Heimweh muß doch eine Heimat haben. Annährungen an Leben und Werk 1740-1817.* Nordhausen 2008, S. 85-105.

¹⁰ Vgl. Benrath: a.a.O., S. 98f.

¹¹ Vgl. Rainer Vinke: *Johann Heinrich Jung-Stilling und Immanuel Kant.* In: Michael Frost (Hg.): a.a.O., S. 79-94.

¹² ニコライによる宗教批判は小説『学士ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生活と意見』*Das Leben und die Meinungen des Herrn Magisters Sebaldus Nothanker*(1773-1776)のなかに登場する。ユングはこの著作に対して自ら反論の書『「ゼバルドゥス・ノートアンカー」の著者で軽蔑すべき俗物に対する牧童の投石具』*Die Schleuder eines Hirtenknaben gegen den hohnsprechenden Philister, den Verfasser des Sebaldus Nothanker*(1775)を書いて激しく批判した。この問題を総括的に論じた研究としては、ヴィンケの以下の研究書を参照。Vgl. Rainer Vinke: *Jung-Stilling und die Aufklärung. Die Polemischen Schriften Johann Heinrich Jung-Stillings gegen Friedrich Nicolai(1775/76).* Stuttgart 1987. この議論については、以下の研究書も参照のこと。戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人フリードリヒ・ニコライ』 朝文社 2001 年(ユングとの論争については 118—136 頁で言及されている)。

¹³ 具体的には以下の著作のこと。Vgl. *Die grose Panacee wider die Krankheit des Religionszweifels.* In: *Johann Heinrich Jung genannt Stilling. Sämtliche Schriften. Band 13. Ergänzungsband.* Hildesheim [u.a.] 1979, S. 629-706.

¹⁴ ハーンの以下の研究書を参照のこと。序文等の一部が邦訳されている(C.メラウ『魂への配慮の歴史 8 正統派、敬虔派、啓蒙派の時代の牧会者たち II』 加藤常昭訳 日本キリスト教団出版局 2002 年、53—100 頁)。Vgl. Otto W. Hahn: *Jung-Stilling zwischen Pietismus und Aufklärung. Sein Leben und sein literarisches Werk 1778-1787.* Frankfurt am Main[u.a.] 1988, S. 371.

¹⁵ Vgl. Hans-Jürgen Schrader: *Die Literatur des Pietismus.* In: Martin Brecht [u.a.](Hg.): *Geschichte des Pietismus. Band 4 Glaubenswelt und Lebenswelten.* Göttingen 2004, S. 386-403.

¹⁶ Vgl. August Langen: *Der Wortschatz des deutschen Pietismus.* Tübingen 1968.

¹⁷ Vgl. Wolfgang Schmitt: *Die pietistische Kritik der „Künste“. Untersuchungen über die Entstehung einer neuen Kunstauffassung im 18. Jahrhundert.* Kassel 1963, S. 22-28.; Schrader: a.a.O., S. 392.

¹⁸ Vgl. Schmitt: a.a.O., S. 23f. 実際にユング自身も、第 4 巻『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活。本当にあった話』のなかで、小説や宗教的な題材を扱っていない詩の執筆に対して、周囲の敬虔主義者たちから理解が得られず、無神論者のレッテルをはられて嫌われたと嘆いている。なお、この箇所は、1772 年頃、すなわち自伝小説を執筆する前の時期のことが語られた部分である。Vgl. In: JS., S. 324.

¹⁹ 例えば、ゴットシェートの妻ルイーゼ・アーデルグンデ・ヴィクトーリエ・ゴットシェート(1713-1762)が匿名で出版した喜劇『パニエをはいた偽信心』*Die Pietisterey im Fischbein-Rocke*(1736)が挙げられる。

²⁰ 注 18 を参照。

²¹ ゲーテとユングの関係については、例えば以下を参照。Vgl. Gerhart Schwinge: *Prophet und Weltkind—Jung-Stilling und Goethe(1990).* In: Ders.: *Johann Heinrich Jung-Stilling(1740-1817), „Patriarch der Erweckung“.* Heidelberg[u.a.] 2014, S. 51-75.; Gustav Adolf Benrath: *Die Freundschaft zwischen Goethe und Jung-Stilling.* In: Hans-Georg Kemper und Hans Schneider(Hg.): *Goethe und der Pietismus.* Tübingen 2001, S. 157-170. 邦論文では以下のものがある。日臺なおみ「J.H.ユング＝シュティリングとゲーテ——18 世紀ドイツのある知識人の生涯——」、茨城キリスト教大学『茨城キリスト教大学紀要』18 号 1984 年、82—96 頁。

²² Vgl. Johann Heinrich Jung-Stilling: *Antwort auf den Auszug eines Briefs über Stillings Wanderungen.* In: *Rheinische Beiträge zur Gelehrsamkeit.* 4tes Heft. Den 1. Ostermonat 1779, S. 291-304.(hier S. 295f.) (以下、JAR と略記し、その横にページを添える。)

²³ Vgl. Ebd., S. 296.

²⁴ Vgl. Nachwort von Dieter Cunz. In: JS., S. 377f.

²⁵ ヴィーラントが編集していた『ドイツのメルキュール』に 2 回に分けて掲載された『アゼ＝ナイト、オリ

エントの話』のこと。冒頭にヴィーラント宛に送付されたヤコービの推薦文が約3頁分付けられているが、作者は匿名となっている。Vgl. Ase=Neitha. *Eine Orientalische Erzählung*. In: *Der Teutsche Merkur*. 3.Bd. 1773, S. 220-237.; *Beschluß der Ase=Neitha*. In: *Der Teutsche Merkur*. 4.Bd. 1773, S. 119-134.

²⁶ JS56-59

²⁷ Vgl. Hans W. Panthel: *From the „bluthrote“ to the „blaue Blume“*. In: *Neophilologus* 72. 1980, S. 582-587.(hier vor allem S. 585f.)

²⁸ ヤーコブがカッセルから書き送った1809年4月15日付の手紙。Vgl. Heinz Rölleke(Hg.): *Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm. Teil 1. Text*. Stuttgart 2001, S. 110.

²⁹ Vgl. Hans-Jörg Uther: *Die Brüder Grimm und Heinrich Jung-Stilling*. S. 301f.; Ders.: *Handbuch zu den >>Kinder-und Hausmärchen<< der Brüder Grimm*. S. 159.

³⁰ Vgl. Heinz Rölleke: *Die Märchen der Brüder Grimm*. München und Zürich 1985, S. 87. (訳は以下の翻訳を利用した。ハインツ・レレケ『グリム兄弟のメルヒェン』小澤俊夫訳 岩波書店 1990年、153—154頁。)

³¹ Vgl. Heinz Rölleke(Hg.): *Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm*. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage(1837). Frankfurt am Main 1985, S. 979.

³² Ebd.

³³ 例えば、以下を参照。ランケはユングの話が疑いもなく18世紀に書かれた文学的なメルヒェンであると指摘しつつも、最近になって幾つかの類話の存在が確認できたと記している。Vgl. Kurt Ranke: *Schleswig-Holsteinische Volksmärchen. Bd. 2*. Kiel 1958, S. 18.

³⁴ Vgl. JAR291-304

³⁵ Vgl. *Auszug eines Briefs über Stillings Wanderungen*. In: *Rheinische Beiträge zur Gelehrsamkeit*. 3tes Heft. Den 1. März 1779, S. 217-224.

³⁶ JAR295 (訳出に際しては、伊藤前掲書 459—460頁の引用訳を参照した。)

³⁷ Vgl. ebd. なお、シュトラースブルク時代のユングについては、以下を参照。Vgl. Hans-Bernd Harder: *Johann Heinrich Jung-Stilling in Straßburg. Ein Weggefährte der Deutschen Klassik*. In: Peter Wörster(Hg.): *Zwischen Straßburg und Petersburg. Vorträge aus Anlaß des 250. Geburtstags von Johann Heinrich Jung-Stilling*. Siegen 1992, S. 11-26.

³⁸ 例えば、伊藤氏の前掲論文「ドイツ自伝小説と敬虔主義—『ハインリヒ・シュティリングの伝記』と『アントーン・ライザー』への考察」の102—107頁を参照。

³⁹ Vgl. Lauterwasser: a.a.O., S. 87.

⁴⁰ フケーが念頭に置いていた民謡は、自叙伝の第1巻に登場する4編だったと考えられる。フケーはその後ユングからメロディーつきの原稿を受け取ると、雑誌 *Die Jahreszeiten* に掲載した。

⁴¹ Vgl. Johann Heinrich Jung-Stilling: *Briefe*. Hrsg. von Gerhard Schwinge. Gießen/Basel 2002, S. 455.

⁴² この民謡集(Friedrich Heinrich Bothe: *Volkslieder nebst untermischten anderen Stücken*. Berlin 1795, 452S.)には、55の歌が所収されている。4編のうちの2編は第1巻『幼年時代』に、残りの2編は第2巻『青年時代』に登場する。なお、ユングの作品ではタイトルが付けられていないが、この民謡集ではそれぞれ次のようなタイトルがつけられている。すなわち、第1巻所収の二つは、„Die drey Jungfrauen“と„Die falsche Ritter“、第2巻所収の二つは、„Die grüne Linde“と„Faramund und Lore“となっている。

⁴³ ユングが本物らしく創作することに長けていたという点は、やはりユングがフケーに手紙で告白した次のエピソードからも窺われる。それによれば、注42で挙げた„Die drey Jungfrauen“の歌をユングはデュッセルドルフのヤコービ兄弟の所に滞在していた時に創作したという。ユングが夜寝る時に考えておいたこの歌を、翌朝さも本当の民謡を見つけたかのように兄弟に報告すると、二人が成立年代などを真剣に考えたので、それを見て笑いを隠せなかったと述べている。Vgl. Jung-Stilling: *Briefe*, S. 459.

⁴⁴ JS76f.

⁴⁵ Ebd., S. 74.

⁴⁶ Ebd.

⁴⁷ Ebd.

⁴⁸ Vgl. Grätz: a.a.O., S. 180.

⁴⁹ JS76f.

⁵⁰ Ebd., S. 77.

⁵¹ 注25を参照。この話においても、夢が重要な役割を果たしている。二作品の比較については例えば以下を参照。Vgl. Hartmut Dedert: *Die Erzählung im Sturm und Drang*. Stuttgart 1990, S. 17-19.

⁵² ここでゲーテによってなされた編集のことについて触れておきたい。ユングが告白しているところによれば、確かにゲーテは多くの箇所を削ったようである。しかし「飾り」については加筆も削除もしていないという。その意味では『ヨリンゲルとヨリンデの話』もユング自身によって書かれたものである

と考えて間違いない。ただし注目すべきは、「重要な宗教的な部分」についても削られたという点である。ユングの主張を以下に引用しておこう。「私は、G（論者：ゲーテのこと）が多くの平板な箇所、浅薄な箇所を削除したことに気がきました。そればかりか、重要な宗教的な部分が削除され、変えられてしまっていました。しかし彼は、飾りを付け加えたり、削ったりはしていませんでした。そこに今ある飾りは、全て私の手によるものなのです」（JAR296）。

⁵³ JM467（訳出に際しては、伊藤前掲書 463 頁の引用訳を参照した。）

⁵⁴ ここで言っているのは、第 2 巻『青年時代』のなかに登場し、後にグリム童話に所収された以下の話のことである。グリム童話のタイトルで言うところの KHM78『祖父と孫』*Der Großvater und der Enkel*(JS93)と KHM150『乞食の女』*Die Bettelfrau*(JS137)のことである。なお、後者のメルヘンに関する日本の研究としては、以下の論考が興味深い。この話を本来のコンテキストであるユングの『青年時代』のなかに戻して読み直した時、単体で読んでいては気付かなかった読みが浮かび上がることを示し、またマレによる現代パロディー版についての解釈も交え、同じ話がコンテキスト次第でいかに多様な読みが可能かという点を考察している。佐藤茂樹『ドイツ児童書の社会史』 明石書店 2013 年、105—119 頁。この箇所の内容は、以下の論文を元になっている。佐藤茂樹「メルヘンとそのコンテキスト—いかに生産的な読書のコンテキストを構成するか—」、関東学院大学文学部 『紀要』第 105 号 1990 年、119—130 頁。

⁵⁵ JAR297

⁵⁶ Ebd., S. 298.

⁵⁷ ユングは自叙伝第 3 巻まで執筆した後、カイザースラウテルン大学に教授職を得て、1778 年 10 月にエルバーフェルトの地を離れた。彼が執筆動機を記した投稿記事は 1779 年 4 月 1 日発行の『ライン論考集』に記載されているので、この記事はすでにエルバーフェルトを去った後に書かれたと推察される。

⁵⁸ グリム兄弟の『ドイツ伝説集』に所収された話は、第 128 番『ヨーハン・ヒューブナー』*Johann Hübner* と第 234 番『キンデルスベルク』*Der Kindelsberg* の二つである。前者は第 1 巻『幼年時代』に、後者は第 2 巻『青少年時代』に登場する。